

# 石見銀山遺跡 ニュース

Newsletter of the Iwami-Ginzan Silver Mine Site

NOVEMBER 2004 NO.8

平成16年11月12日発行 第8号

島根県・大田市・温泉津町・仁摩町教育委員会



## >> Contents

page 2~3	世界遺産登録までの道程	(1) 推薦書作成と石見銀山遺跡 世界遺産登録推進室 鳥谷芳雄 (2) 史跡保存管理計画の策定 大田市 遠藤浩巳
4	総合調査から	(1) 発掘調査 大田市 中田健一
5		(2) 文献調査 石見銀山資料館 仲野義文
6		(3) 石造物調査 世界遺産登録推進室 鳥谷芳雄
7		(4) 街道調査 世界遺産登録推進室 佐伯徳哉
8	事例調査	(1) 「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録記念行事に参加して 世界遺産登録推進室 太田俊介 (2) 平泉の文化遺産を視察して 世界遺産登録推進室 中田行宏
9		第三回 石見銀山講座開催 広域行政組合 今田善寿
10~11	普及・啓発活動	町並みを歩く⑦～修理の現場から～ 大田市 三谷岳史
12	整備事業から	
13	地元の活動から	世界遺産をめざす会 仲野義文
14	石見銀山遺跡調査活動日誌抄	

【ユネスコ松浦事務局長の銀山視察】  
事務局長(中央)を囲んで(10月18日)

# 世界遺産登録までの道程

## ●推薦書作成と石見銀山遺跡

石見銀山遺跡の世界遺産登録を目指す上で、必要不可欠な手続きの一つに推薦書の作成があります。正式には「世界遺産一覧表記載推薦書」といい、世界遺産条約の締約国であって、世界遺産に推薦しようとする国が、ユネスコ（国連教育科学文化機関）の世界遺産センターに提出する重要な書類です（※1）。本文、図面、スライド、スチール写真からなり、あわせてビデオ、DVDが添えられます。言語の表記は英語またはフランス語とされています。

これを受理したユネスコは内容を審査し（受理以前の事前審査もあります）、次の年に現地を調査します。そして翌年、年一回開催される世界遺産委員会で審議されて、そこで世界遺産としての可否や審議保留が決まります（※2）。

このように、推薦書作成は世界遺産登録実現のための重要な仕事ですが、この原案作りは候補の遺産が所在する地元自治体が担当します。現在、私たちは資料整理や情報収集を行いながら、コンセプト（※3）を固めたうえで、本文の作成作業を進めています。また同時に、これには学術的で専門的な立場による検討が欠かせないことから、6名の方による特別の専門委員会を設けて指導を仰いでいます（※4）。

さて、推薦書の本文は大きく2つの内容で構成されます。1つは推薦しようとする資産が持つ、世界遺産としての顕著で普遍的な価値を記した部分、もう1つはその資産が将来にわたってどのように保護されるのかを記した保存管理計画の部分です。

前者では石見銀山遺跡が「作業指針」に定められた登録基準に照らし合わせて、いかに世界遺産として相応しい資産価値を備えているか、かつ、それが位置および環境、あるいは材質、デザイン、技術に関して真実性があって、他の類似遺産との比較において類例がない、もしくは極めて稀であるかということ証明しなければなりません。

また、後者では石見銀山遺跡が世界人類のかけがえのない遺産として、将来にわたって保護が保証されていること、つまり、誰がどのようなかたちで護ろうとするのか、具体的に実行性のある保存管理や整備活用計画が求められています。

今夏、中国の蘇州において第28回の世界遺産委員会が開催されました。それは和歌山・三重・奈良3県

にわたる「紀伊山地の霊場と参詣道」が、日本で12番目の世界遺産となったことが決定した会議でもありました。参加された方の話によると、近年この会議では候補に挙げられた資産が、第1にしっかりとした具合的な保存管理計画によって護られているかどうか、第2に同種遺産と十分に比較研究されているか、あるいはその資産が持ちうる「文化的景観」は何か、といったことが議論の中心になっているといえます。つまり、世界遺産を決定づける重要なポイントとして、特にこの2点が推薦書のなかでうまく説明できていなければならないということです。

石見銀山は16世紀から17世紀のはじめにかけて、国外に向けて大量に流出した日本銀の、先頭を切った出た石見銀の産出地であり、東アジア経済の変革と東西文化の交流をもたらす切っ掛けをつくった、国際史的な意義をもつ銀鉱山です。まずはこの点が世界にアピールできる大きな価値と言えますが、石見銀山が鉱山遺跡であって広い意味での産業遺産であるからには、もう一度世界の同種遺産を見渡しながら、その比較研究のうえで明らかにできる価値は何か、そしてまた、石見銀山遺跡を文化的景観という観点から捉えた場合にはどのような景観を言うのかを明確にしておかなければなりません。

「文化的景観」とは聞き慣れない言葉です。それは「自然と人間の共同作品」「人間と自然環境との相互作用の表現」とされ、人間が所与の自然に働きかけて出来た、長期にわたる固有の歴史的で文化的な景観を言います。石見銀山遺跡であれば、石見銀山の開発や支配・流通システムによって生み出された独特の産業景観ということになります。

例えば、仙ノ山に階段状に残る数多くの平坦地は、鉱山開発によって出来た人口地形ですが、いまは多く竹林と化しているものの、まさしくそれは生産や消費活動の動かぬ証拠としていまに残る景観である（残存景観）、あるいは、温泉津の町並みは、狭い谷地形のなかであって背後の岩山をも削りだして屋敷地が造られています、それは銀山の外港および北前船寄港地としての賑わいの中、町として発展した結果を反映したものであり、この土地利用の在り方がいまも引き継がれて今日の特色ある景観を形成している（継続景観）、といった例をあげることができます。

また、石見銀山遺跡が持っていた技術や経営面での独自性を明確にすることも大切だと考えています。技術史的な評価で言えば、石見銀山が灰吹法と呼ぶ

大陸伝来とされる精錬技術を、現地生産できる応用技術にまで高め、良質で大量の銀生産をシステムとして国内で真っ先に採り入れた鉱山であったことが重要です。なぜなら、世界的規模ではほぼ同時多発的に起きた銀の大量生産の時代にあって、東アジア世界における日本銀生産の隆盛を導き、前述のような外に出ることによって大きな世界史的な意義を生み出した要因がそこにあるからです。

あるいはまた、石見銀山では湿潤温暖な気候のもと、周囲にある燃料となる森林資源や、鉱山用具や資材となる鉄・鉛・マンガンなど、他の鉱物資源にも恵まれて、人力を基本とする集約的な鉱山開発が長らく続けられていました。そこでは自然の恵みをただ受け入れるだけでなく、資源の再利用や環境破壊を出来るだけ少なくするような思想や工夫が働いていましたし、さらには鉱山労働者への配慮として鉱山病対策や福祉制度などがありました。こうした石見銀山の全般的な様相に着目するならば、そこには日本的な鉱業技術と経営の特色とも言うべき、持続的で環境負荷の少ない循環型の鉱山開発を見て取ることができます。

石見銀山遺跡の世界遺産としての価値は何か。推薦書に表すべきこのことは明らかでないでいて、決して容易ではない作業課題です。世界遺産登録における現在の趨勢を踏まえながら、いろいろな視点からこれを見出すこと、そして、それを世界に向けてアピールし理解してもらうことが大切であると考えています。（世界遺産登録推進室 鳥谷芳雄）

- ※1 日本では、文化遺産は文化庁が主管し、同長官が代表者署名をします。
- ※2 文化遺産の場合、実際に内容を専門的に評価し現地を調査するのは、ユネスコが諮問するイコモス（国際記念物遺跡会議）という非政府の国際専門機関です。
- ※3 コンセプトは世界遺産としての価値を数行に凝縮して表現した文章のことです。
- ※4 推薦書作成専門委員会は次の方々です。  
委員長 藤岡大拙氏（石見銀山遺跡調査整備委員会委員、鳥取女子短期大学学長）  
委員 青柳正規氏（石見銀山遺跡調査整備委員会委員、東京大学大学院教授）  
委員 斎藤英俊氏（石見銀山遺跡調査整備委員会委員、筑波大学大学院教授）  
委員 西村幸夫氏（東京大学大学院教授、イコモス副委員長）  
委員 村上 隆氏（石見銀山遺跡調査整備委員会委員、奈良文化財研究所主任研究員）  
委員 脇田晴子氏（前石見銀山遺跡調査整備委員会委員、前滋賀県立大学教授）

## ●史跡保存管理計画の策定

石見銀山遺跡は昭和44年に国内で初めての鉱山遺跡として国史跡に指定され、平成14年の追加指定によって、指定面積は約320ヘクタールという広大な面積を

もつ史跡になりました。

その後今年7月には「石見銀山街道」と「宮ノ前地区」を、来年1月には「銀山柵内」「羅漢寺五百羅漢」「沖泊」「柄ヶ浦」を追加指定申請し、平成17年度中には指定面積が約400ヘクタールの国史跡となる予定です。

このように石見銀山遺跡は広大で広域な史跡であり、生産・生活・信仰・支配・流通といった多様な要素から構成されていることから、これを将来にわたって保護するために個別の物件ごと、あるいは地区ごとに必要な保護や管理の方法を定めておく必要があります。これが保存管理計画です。

具体的には現状変更等の制限と許可基準、公有地化、整備活用計画などの“保存管理の基本方針や規制の程度”が明示されることとなります。

大田市・温泉津町・仁摩町ではこの計画づくりに平成13年から着手し、今年度中には策定事業を終了する予定です。この保存管理計画は世界遺産の保存管理計画（マネジメントプラン）ともなります。

そのためコア（史跡などの国指定文化財）と周囲のバッファゾーン（緩衝地帯）をあわせた計画ともなっています。世界遺産推薦書には「保全及び保存の状態」の章で「保全・保存の方法」を記載することになっており推薦書に付録として提出することになっていきます。遺産の価値を明らかにすることと共に、必須の要件とされています。保存管理計画は史跡の実効性のある保護を行うための規範となる計画にしなければなりません。

一方で今年度は保存管理計画策定委員会と並行して石見銀山景観保全審議会を開催し、バッファゾーンとして歴史的文化的景観を保全する地域を決める作業を進めているところです。今年8月には審議会の現地調査を実施し、コアとその周辺域の景観を構成している自然的要素（自然の地形・森林・農耕地など）と人文的要素（集落・道路・工場などの産業関連施設など）を調査、9月21日には実質的審議が始まったところです。（大田市 遠藤浩巳）



▶景観保全審議会現地調査（石見城跡）

## (1) 発掘調査 大田市 中田 健一

今年度は、宮ノ前地区、本谷地区と町並み保存地区内でトレンチを中心に発掘調査を行っています。調査の目的は、保存のための手だてとなる資料を得ること、石見銀山の実態を解明することにあります。

宮ノ前地区では、かつて精錬工房が検出された場所から約130m東へ位置している尾根について試掘調査を行いました。

調査の結果、道跡が確認されましたが、建物跡などは検出されませんでした。しかしその近辺に江戸初期の石造物が確認され、江戸時代から続く土地であることが判明しました。



▲宮ノ前地区調査

歴史的文献では、慶長7(1602)年10月26日付けの大久保長安の書状に「大森普請之事」とあり、大森の町づくりをおこなったといわれています。こうしたことから、県道の調査区とあわせ、付近一帯は石見銀山遺跡の中でも重要な地域として、地元の方のご理解をいただいて国の史跡指定申請を行いました。

また、町並み保存地区内では、伝統的建造物の修理工事などに併せて試掘調査を行っています。

そのうち植市場地区のトレンチでは江戸後期の遺構面と、表土下1mのところ江戸前期の遺構面を確認し礎石や土間面が検出されました。堆積していた層にはカラミなどが含まれ、前年度調査の下河原地区と同じように、土地を嵩上げしていた状況を確認しました。

昨年度、本谷地区で発見された岩盤加工遺構は、用途や年代など不明な点が多いため、「謎の岩盤加

工遺構」といわれていました。今年度も継続して発掘調査を行い、岩盤に残された大小の穴の性格や、岩盤が掘られていった順序などを検討しています。発掘調査は現在も継続中ですが、これまでの調査の中で、岩盤加工段の上から2段目に設定したトレンチにおいて、整地土中から江戸初期の年代を示す遺物のみが出土していることから、江戸初期には現在の形に加工されていたことが明らかとなりました。さらに3段あるうち最上段が最も後に彫り込まれたこともわかっています。

本谷地区は、石見銀山史の中でも最も盛んに採掘がおこなわれたところ。掘りだした鉱石をどのように選鉱し、製錬したのか、その具体的な現地の状況がそのまま残存していることは、わが国の鉱業史を知る上で大変貴重であるといわれています。

今後の調査で、謎が少しでも解明されて、銀山最盛期に活況を呈した本谷の歴史が具体的にすることが期待されています。



▲本谷地区調査

## (2) 文献調査 石見銀山資料館 仲野 義文

文献調査では、鉱山経営者や代官所役人など直接銀山の経営や支配に関わる諸家の古文書と併せて、銀山周辺に残る地方文書の調査を進めてきました。今年度は昨年度に続き、邑智郡美郷町中原義治氏宅に所蔵される古文書について実施しました。

中原家は旧邑智郡潮村の村役人を代々勤め、家業では農業の他に製鉄業・酒造・水運業など、多角的な経営を行っていました。そのため同文書には、村政に関わる史料のほか、鉦大勘定帳や船賃帳といった家業に係る史料も収められ、実に多様な文書構成となっています。

今回の調査では、事前の予備調査を踏まえて、とりわけ銀山の経営や幕領支配に関わる重要な史料については、デジタルカメラでの撮影を実施し、その収集を図りました。ここでは収集した史料の中から、銀山領の「一家一寺制」に関わる史料について紹介しましょう。

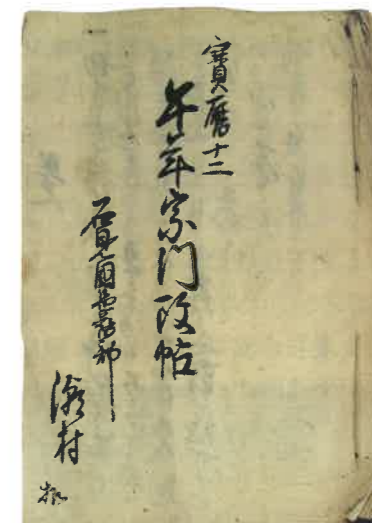
江戸時代、幕府はキリスト教弾圧のため、寺請制度としていづれかの寺院の檀那となることを義務付けました。そのため村方では家内人別ごとに宗門改めを実施し、宗門改帳を作成したことはよく知られています。しかし、これは必ずしも家族全員が同一の菩提寺の檀那となることを義務付けたものではなく、実際には同一家族内においても夫と妻、親と子で檀那寺が異なることがあったようです。



▲御触書の一部

写真は、天明3年3月大森代官川崎平右衛門から、銀山領の村々に対して出された触書の写しです。内容は総じて檀家制度に関わるものですが、第1条には「他所より嫁参り候節、夫菩提寺の檀那に相ならず、実方菩提寺の檀那に成り居り、相果て候後、家

内の内よりその跡を継ぎ、実方菩提寺の檀那に相なり候もこれあり候へども、以来は何方より嫁来たり候とも、女房は夫の菩提寺の檀那たるべく事」とあり、夫と妻との間で檀那寺が異なることがないよう述べられています。また、第2条には「子供何人これあり候とも、親と同居の内はその親の菩提寺檀那たるべく事」と、親子間でも夫婦間と同様であるべき旨が述べられています。つまり、この触書は、これ以後一家がすべて同一菩提寺の檀那となるべきことを、代官が村方に命じたものであるといえますが、このことは逆にそれ以前には「一家複寺」であったことを示すものといえるでしょう。



▲宝暦12年宗門改帳

それでは実際に、同一家族内において檀那寺が異なることはあったのでしょうか。幸いに同家の文書には宝暦12年宗門改帳が存在するため、それによってこの点を見ると、この宗門帳に記載された家数は都合35軒で、内6軒が同一家族内であっても異なる檀那寺であったことがわかります。例えば、A家の場合、A氏本人は都賀西村正圓寺、妻は長藤村正立寺、弟2人の内1人は長藤村正立寺で、もう1人は潮村正専寺。またA氏の倅はA氏と同様に都賀西村正圓寺ですが、母はA氏とは異なり長藤村正立寺をその菩提寺としました。このように同一家族内でも実に複雑な寺檀関係であったことが窺われます。なお、天保12年の宗門帳では38軒すべてが、一家一寺となっていますから、こうした触書が遵守されたものと思われる。

石見銀山遺跡の調査では、墓石などの悉皆調査が行われていますが、今後はこのような制度的な変化が墓石の上でどのように現れていったのかが、重要な問題といえるでしょう。

### (3) 石造物調査

……石造物調査部会と福光石切場跡の見学

世界遺産登録推進室 鳥谷 芳雄

石造物調査班では9月9日に今年度2回目の部会を開きました。調査報告書第5冊を作成するための中間報告会で、執筆予定者の報告と参加者による共同討議を目的とした会議でした。報告書は平成9年(1997)度以来行ってきた調査の成果をまとめ、今後の課題を明らかにしようとするのがねらいです。

今回、諸調査の中の分布調査結果がはじめて公表になります。概数ですが、銀山柵内には墓塔・墓標を中心に5,900、大森地区には5,600確認されています。埋もれているものを加えれば相当数にのぼりますし、周辺地域にも広く分布が及んでいます。これらは石見銀山の盛衰と深く関わりながら製作されたものであり、銀山の歴史や文化を知る上で欠かすことができません。

さて、こうした石造物は一体どこから運ばれたのか、ご存知ですか。大半は福光石と呼ぶ凝灰岩で、その名のとおり現在の温泉津町福光で産出された石材です。石見銀山遺跡の中心からすると、西南西方向に直線で9kmほどの距離があります。

実は部会の前日、参加者はこの福光石の石切場跡を見学しました。石見銀山に多くの石造物を供給した現地を、調査班として一度確認しておきたかったからです。

福光石は今も採掘されており、坪内石材店によって経営されています。代表者の坪内敬夫さんは、福



▲石造物調査部会の開催

光石の石工として江戸時代初期から続く本坪内家の当主です。

坪内さんに解説いただきながら、かつての石切りの跡や、今まさに機械で切り出している作業場を見て回りました。福光石は採掘場所などによって荒目、中目、細目の違いがあり、細目石はキメが細かいため彫刻材に適し、羅漢寺の五百羅漢坐像群が制作されたと言います。

採掘に機械が導入されたのは昭和47年(1972)、それ以前と以後では採石量に格段の差がありました。その時の逸話が紹介されました。1年間かけて掘っていた採石量を、機械は1カ月ほどで掘ってしまい、さて残り11カ月分をどのように消化したらよいのか、真剣に悩んだとか。

現場は過去の手掘りの跡と、現代の機械による石切りの跡とが隣り合わせにあり、見比べると石を切る技術の違いがはっきりと分かります。そして、その造形の対比が面白くもあります。

石見銀山遺跡は、鉱山跡を中心に山城跡、街道、港湾、および歴史的町並みからなる集合遺産です。石見銀の生産と支配、流通、町の形成などに関する遺跡が一体のものとしてまとめられているところに大きな魅力があります。

前述のように、この遺跡群の諸所には銀山と関連して豊富な石造物が残されました。その多くがこの福光から供給されたという歴史、そして、その痕跡がいまも良好に残されているという事実を、改めて印象づけられた日でした。



▲福光石の石切場跡

案内役の坪内敬夫さん▶  
(左端)



### (4) 街道調査

世界遺産登録推進室 佐伯 徳哉

今年度は、昨年度の街道調査の成果をうけて、石見銀山街道鞆ヶ浦道、同温泉津沖泊道の出発点でもあり終着点でもある、鞆ヶ浦(現在の仁摩町馬路の友)、沖泊(温泉津町沖泊)の調査を実施しています。

さて、今回は、沖泊の調査を実施した内容についてご紹介します。沖泊は、概ね16世紀後半(戦国時代)に毛利氏が銀の搬出をしたという港です。港の南側の尾根には毛利氏が1570年頃に築いた鶴丸城の跡があります。また、湾の入り口付近には、毛利氏がこのあたりを支配する前、概ね16世紀の半ばまで、この付近を支配した温泉氏の根拠地のひとつ串山城跡(櫛島)があります。沖合から船で湾内に入ると、双方とも、湾ににらみをきかせていることがよくわかります。

また西の外海から湾内に入ると湾の南北両岸には、船を繋留するために岩を穿って作った白岩・はなぐ

り岩などが夥しい数、残されており、なかには、ごく最近まで利用されていたものもあります。

湾を奥深く入っていくと、最初に目に飛び込むのは、集落の浜手にある恵比寿神社の社殿です。社殿は、浜に向かって入港する船に向かいあうように建てられており、海から眺めると、神々しく見えるのがなかなか印象的です。

建築の専門家によれば、集落の浜手にある恵比寿神社の建物は、室町時代からの部材を残しているといえます。この社殿脇には、浜の井戸があり、寄港した船の給水所であったと伝えられます。また、上陸すると集落の家々は、狭い谷間の中心軸となる小川とそれに沿うように作られた小道を挟んで両側に連なっています。明治初年頃の切り図を見ても、同じような地割が見られます。

これにかなり近い平面プランは、友でも見られ、リアス式海岸の小湾を利用して作られた港には古くから顕著に見られる港湾の形であるようです。長い歴史の中では、背後の尾根を若干削るなどの若干の造成はあったかもしれませんが、基本的な平面プランは踏襲してきていると考えられます。

沖泊湾岸の白岩▶



◀沖泊 恵比寿神社と浜

## (1)「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録記念行事に参加して

世界遺産登録推進室 太田 俊介

去る、平成16年9月19日に和歌山県本宮町で「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録記念行事「森羅万唱～紀伊山地からの祈り～」が開催されました。この行事の趣旨は、地域の人々が登録を祝うとともに、世界遺産を未来に守り伝えていくという新たな決意の機会とすることです。

内容は、熊野古道の各ルートの踏破ウォークや各地の郷土芸能の披露、熊野本宮大社の旧社地で行われた夜の幻想的なコンサートなど趣向を凝らしたものが多くありましたが、行事の一環で行われた世界遺産交流会議に出席してきました。



▲交流イベント横断幕



▲交流ステージ

会議の目的は、地域の語り部の人たちや古道の保全活動を行っている団体等と行政関係者が集い、これから世界遺産をどう守っていき、どう活用していくのかを考えるということです。そこで一番の話題となったことは、来訪者がどんどん増えることは地域の活性化につながりいいことだが、その反面、ゴミの問題やタバコの火の不始末など新たな問題にどう対処していくかということです。これは石見銀山にも同様に当てはまることであり、世界遺産登録地全体の課題であると思っています。トイレや道標の整備など受け入れ体制を整えることで解決できる点もありますが、ゴミや火の問題などは訪れる人のマナーが一番大事です。ルール違反の人に対しては、はっきりと注意することができる雰囲気づくりが大切だと感じました。世界遺産を見てその価値を感じてもらうためには、他の観光地とは一段上のレベルを来訪者にも求める、そのことが世界遺産を守っていくということにつながるような気がします。

それから印象に残ったのが、「来訪者が我々の暮らす地域を誉めてくれる。若い人も自分の地域に誇りを持てるようになった。」との地元の方の声です。「自分たちが良いと思っていないと、訪れる人も良いと思ってくれない。」確かに、地元の人々が本当に地域に誇りを持っていないような場所へは行ってもおもしろくないかもしれません。石見銀山でも、地元の事を本当によく考えて、子どもたちに自信を持って伝えていける町にしようと思っている人達がいるのを知っています。世界遺産登録に向けて、このような意識が地域全体に広がっていけばいいと思います。

熊野古道での多くの来訪者を見ると、老若男女個人から団体まで本当に様々な人がいました。また今回はあまり見かけませんでしたが、外国人も多く訪れてくるでしょう。平成19年以降、石見銀山はどのように来訪者を受け入れているのでしょうか。



▲バス乗車の混雑模様



▲熊野本宮大社参道



▲来訪者へのマナー喚起

## (2)平泉の文化遺産を視察して

世界遺産登録推進室 中田 行宏

### 第一印象

人口約9千人の平泉町は、毛越寺や中尊寺など奥州藤原氏三代による平安文化の中心地であり、年間160万人の観光客が訪れる町です。観光を中心とした町で、掘れば遺跡が出てくる町でもあります。

私が、最初に石見と陸奥の文化の違いを感じたのは、見慣れた田園風景の中にある稲の乾し方でした。こけしのような稲掛けを見て、同じような乾し方をする温泉津町の西田地区のヨヅクハデを思い出しました。ところ変われば乾し方も変わる、みちのくの文化を感じました。



▲みちのくの田園風景

### 「石見銀山遺跡」と「平泉の文化遺産」

平成20年登録を目指す「平泉の文化遺産」は、中尊寺と毛越寺、無量光院跡、柳之御所跡を中心に平安末期の約100年間に都の文化を受容しながら独自に発展させた仏教寺院、浄土庭園など華麗な黄金文化の遺産群で、古代から中世への過渡期の地方文化として突出した事例として評価されています。



▲毛越寺 浄土庭園大泉が池

観光客30万人の大森町と観光客160万人が訪れる平泉町をあえて比較してみると、やはり知名度が違います。東京から新幹線で日帰りができる距離にあるため、修学旅行も多く東北は基より関東一円まで良く知られています。



▼中尊寺 金色堂

▲毛越寺 浄土庭園 「遣水(やりみず)と菘」

世界遺産登録に向けた取組みについて、岩手では「平泉の文化遺産を世界遺産に」と言うテレビコマーシャルが流れ、平泉や一関の駅前には世界遺産の看板等が設置されていました。また、平泉町では世界遺産登録推進事業への支援協力として企業や個人等から協賛金を寄付



◀JR平泉駅 構内



▼JR一関駅前

してもらった平泉町世界遺産推進基金が設置されています。

石見銀山と言えば、国道9号線に暫定リスト掲載の看板が設置されているだけです。

今後、官民上げて、世界遺産登録を盛り上げていく取組みが早急に必要だと感じました。

### 石見銀山の課題

世界遺産に登録された石見銀山遺跡に、たくさんの来訪者を受け入れる時の対応がこれからの大きな課題になります。具体的には、大森や温泉津の町並みでの受け入れ体制、駐車場やトイレの整備、交通規制等が課題になります。

また、平泉町では1年を通して、様々なイベントが行われています。石見銀山でも1年を通して銀山を見せることができるように、行事や芸能の復活を検討や銀山にしかない魅力の創出や見せ方を検討する必要があります。

### 終わりに

平成19年の登録を目指す石見銀山遺跡に残された時間はあと3年です。この間に課題を整理して、解決に向けて我々行政の頑張りどころだと思います。登録のためには、地元住民の方々や民間団体及び地元企業の協力と支援が必ず必要になります。

現在、世界遺産登録に向けて島根県・大田市・温泉津町・仁摩町は一丸となって、諸課題に取り組んでおりますので、御協力をよろしくお願いいたします。



▲達谷窟 バリアフリーのトイレと駐車場



▲平泉町設置の誘導サイン

# 全国大学生島根キャンプ2004年 第三回 石見銀山講座開催

大田市外2町広域行政組合 今田 善寿

将来の石見銀山遺跡の研究者を育成し、石見銀山の情報を全国に発信することを目的に「第三回石見銀山講座」を八月二十三日(月)～二十七日(金)にかけて開催しました。

今年で3回目になるこの講座は、国立三瓶青年の家(大田市三瓶町)を主会場に、全国から歴史・デザイン・建築等を専攻する大学生・大学院生の精鋭二十三名が集まりました。



▲大久保間歩坑道内(※一般公開はしていません)

**初日**は、16:30より開講式、大田市外2町広域行政組合の副管理者である蓮花正晴(大田市助役)のあいさつで始まりました。その後、三瓶自然館サヒメルの指導員 中村唯史氏を講師にお招きし、「石見銀山と自然景観」という演題で、三瓶山と出雲平野や埋没林の関係、大江高山火山群のなかの石見銀山鉱床など石見銀山や国立公園三瓶山周辺の自然史や景観を中心に非常に分かりやすく画像を使いながらご講義いただきました。

**二日目**は、本講座の一番の見所であるフィールドワークを行いました。仙ノ山山頂付近にある石見銀山集落跡や於紅ヶ谷間歩群、謎の岩盤遺構がある釜屋間歩、石見銀山遺跡の中で、もっともスケールの大きな遺跡であるが、一般公開をしていない「大久保間歩」などを見学したほか、

「龍源寺間歩」、灰吹銀の出土した「出土谷遺跡」、など多彩な遺跡を巡りました。

午後からは平成14年に石見銀山遺跡として国の史跡に追加指定されている銀鉱石の積出港とされる仁摩町馬路の「鞆ヶ浦」や中世の港の景観がよく残っている温泉津町の「沖泊」を見学し、本年7月に重要伝統的建造物群保存地区に選定された温泉津町の町並みを歩きました。当日はあいにくの雨天であったため、一部を取り止めざるを得ませんでしたが、貴重な遺跡を直接目に見ることができる良い機会となりました。

**三日目**は、石見銀山歴史文献調査団員の岩屋さおり氏(城西国際大学非常勤講師)をお招きし「文献・史料調査と大森鉱山」という演題で講義が行われました。

石見銀山は日本の中では佐渡や生野の銀山同士の繋がり、世界で言えば中国を中心とする東南アジア・東アジア海域貿易の中での銀の流通に大きく関与してい



▲謎の岩盤遺構 釜屋間歩

たり、そして更には15世紀にヨーロッパがどんどん進出して16世紀頃には盛んに日本に来るようになりました。そして、みなさんご存知のザビエルなどがやってくるようになり、その時代に日本の銀が海外



▲発掘調査事務所で出土品見学

に於いて非常に注目され、そしてその産出地が、実は石見だったということが分かってきたということでした。

その後、発掘調査・石造物調査・街道調査など総合調査の成果や、周辺の建築・保存修復の現状について各担当者から説明を受け、意義深い講座となりました。説明を受けた後、受講生は実際に大森の町並みを散策し、肌で大森を感じ、理解を深めました。

この日の夜には、小田誠太郎氏(和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課世界遺産登録推進室)による一般公開講座『「石見銀山」と世界遺産「熊野古道」を「あすてらす」にて開催し、今年の七月に世界遺産に登録された「熊野古道」を紹介しながら、世界遺産の意義、登録後の保存管理の大切さについての話を一般参加者約百八十人とともに聴講しました。

石見銀山遺跡について「熊野古道より歴史・文化的な景観が自然な形で残っている」と高く評価され、また、「世界遺産登録後考えた観光客の受け入れ、保存管理を登録前から、今から取り組んでほしい」と助言をいただきました。

**四日目**は、小林准士氏(島根大学助教授)による講義『「銀山旧記」の歴史と石見銀山』を受講しました。「銀山旧記」は古文書を編修して、それを大田南畝という幕府の役人が文人に送ったり、あるいは、銀山の歴史を編さんする動きが起こったために制作されたのではないかとのことです。その

意味で18世紀後半から19世紀初頭の銀山の経営の歴史、あるいは銀山附役人や銀山師たちの立場というものがよく反映されているということが分る、というものでした。午後からは、白石昭臣氏(元島根県立大学教授)による「石見銀山とその周辺の民俗」を受講しました。石見銀山周辺の文化は決して大きく派手なものではないけれど、人の祈りに似た絵や聖や行事、あるいは社寺はよく残っているほうであるとのことでした。

**最終日**は、閉講式をおこなった後、三瓶自然館、小豆原埋没林公園を見学しました。

四泊五日の日程で、一流の講師陣の講義を受け、また、実際に石見銀山遺跡の現地を見て回ることのできる絶好の機会となった本講座が、未来の石見銀山を研究する担い手の切っ掛けになっていること期待しています。



▲総合調査の説明風景



▲銀山街道の一部「温泉津沖泊往還」

## 町並みを歩く 7 ～修理の現場から～ (大田市 三谷岳史)

### 加藤家主屋・板塀 江戸末期(推定)

大森町昭和区。銀山へ向かう街道の西側に位置し、武家様式を持つ建物です。明治中期から昭和初期まで医院として使用されており、正面はそのための改造が行われていました。玄関右手の3畳間は大正のころに診察室として増築されたものですが、部屋内の化粧板をはがすと長押(なげし)が架けられていた痕跡などかつては式台だったことが判明したため、



〈修理前〉(観世音寺境内より)

#### 加藤家主屋・板塀

武家住宅としての特徴を良好に残している建物。痕跡から数回の大きな改造が行われたことが分かった。

復元しました。

また、現在床の間として使われている所はもともと畳敷きの縁側であったことや、当初の床の間の位置も推定できましたが、今回修理では現況のまま使用することになり、記録にとどめることにしました。

縁側の建具はサッシュに変更されていましたが、もともと立て付けられていた木製ガラス戸のガラスを再用し、造り直しました。



〈修理後〉

増築された3畳間を解体し式台を復元した。ブロック塀は板を貼って修景し、門回りは大和塀に変更した。

### 渡辺家主屋 明治中期(推定)

大森町宮ノ前。城上神社の北側にある、石垣の上に建つ民家です。

修理に先行して実施した現況調査の際、小屋裏から板図が見つかりました。それによると、正面の縁側が創建当初は南側(現在は板壁)にも廻っていたことが読み取れました。それを裏付ける痕跡として、壁の裏から改造前は開口部だったことを示す雨戸の



〈修理前〉

#### 渡辺家主屋

正面のガラス戸部分が縁側として使われていたが、板図によれば当初は左手の板壁からトイレにかけ、鍵手状に回り縁となっていた。



〈修理後〉

縁側のガラス戸は再用している。下屋は瓦一枚分外側へ張り出して、雨しぶきが建具や壁にあたらなかった。

## 世界遺産をめざす会

「石見銀山世界遺産をめざす会」(会長:河村政経)は、石見銀山遺跡の世界遺産暫定リスト登載を契機に、平成13年7月に発足しました。3年目を迎えた現在、会員数は個人140名、法人10団体となっています。これら会員の多くは地元大田市・仁摩・温泉津町を中心とする県内者の方々ですが、なかには東京・大阪・福岡など県外者の入会も見られます。

本会の目的は、世界的に優れた鉱山遺跡である石見銀山を、地域に暮らす私達自身が主体的に学習する場を設け、世界遺産としての遺跡の価値やその歴史について認識を深めることを第一義としています。と同時に、このような世界遺産の登録を単に行政側の問題として捉えるのではなく、このことを地域社会全体のそれとして受け止め、登録に向けた諸課題の解決を私達一人ひとりが自発的に考え、また行動することをその理念としています。



▲遺跡の保全活動

炭業者の協力を得て竹炭とし、新たな資源としての活用も積極的に進めています。この保全活動で作られた竹炭は、消臭剤として周辺の観光施設や公衆トイレに設置し、地域社会への還元も図っています。なお昨年度は、島根県川本総務事務所と本会が共働で実施し、約70名の方々の参加が得られましたが、こうした私たちの活動は少しずつではあるものの、地域の中でようやく認められるようになってきました。

さらに、このような学習会や保全活動に加え、平成14年からは2年間、トヨタ財団の研究助成を受け、鉱山や町並みの近代化の過程に関する調査研究も行っています。これは身近にある石見銀山を私たちの手で研究することで、その価値をあらためて再認識しようとしているものです。

ところで、石見銀山遺跡の世界遺産登録は、あと3年後に迫ってきました。しかし、「登録は保全のスタート」と云われるように、本当に大切なのは登録後かもしれません。とりわけ、広範囲に広がる本遺跡の場合、その保全管理が大きな問題となっています。未来に亘って遺跡を守り、伝えるためには、行政・市民・企業が良好なパートナーシップを構築し、地域社会挙げての取り組みが必要といえるでしょう。

(石見銀山世界遺産をめざす会 事務局長 仲野義文)

#### 【連絡先】

石見銀山世界遺産をめざす会  
島根県大田市大森町ハ51-1 石見銀山資料館内  
(TEL0854-89-0846)



▲講演会の様子

さて、本会の活動は、おもに学習と保全を柱とし、その他に石見銀山遺跡のPRやコンサートの開催など、多面的に行っています。とりわけ講演会では、石見銀山や世界遺産のことだけでなく、文化遺産の保全や活用のあり方などについても、専門家を招いて学習しています。特に最近では、イギリスの市民運動からはじまったナショナルトラストや、フランスのプレス・ブルゴーニュにおけるエコミュゼ(エコミュージアム=環境生活博物館)の取り組みなどといった、国内外の事例についても学習しています。

また、会員や地域住民に呼びかけ、遺跡に群生する竹木を伐採するなどの保全活動も行っていますが、この活動では本来なら廃棄物となる竹を、地元の製

# 石見銀山遺跡調査活動日誌抄

上半期・平成16年4月～平成16年9月

4/8	県市町)第14回合同会議(於:大田市)	7/19	広域)海から見た石見銀山 (韓島～鳥井沖、100名参加)
4/10～11	石見銀山遺跡探索ツアー(於:大森町)	7/20	市町)第7回史跡保存管理計画策定委員会 (於:大田市)
4/14	県)港湾集落調査発掘調査開始(～5/27)	7/20	市町)第1回景観保全審議会(於:大田市)
4/15	県市)サイン整備地元意見交換会(於:交流センター)	7/20	大森町民)サイン計画現地視察(於:大森町)
4/15～17	市)小泉和子氏熊谷家家財調査現地指導 (於:大森町)	7/20～21	文化庁記念物課磯村主任調査官・ 平澤麻衣子氏現地指導
4/16	県市)発掘調査部会(於:大森町)	7/23	県・市・町)街道調査検討会(於:松江市)
4/16	温泉津)温泉津重伝建選定告示	7/31	小野文部科学副大臣現地視察(於:大田市)
4/20	県市)科学調査部会(於:大森町)	8/3	県)石見銀山遺跡支援プロジェクト事業調査 会議(於:大田市)
4/21	県・市・町)発掘石造物調査部会	8/9～11	国立歴史民俗博物館員現地調(於:1市2町)
4/23.26.27	市)景観保全地元代表者説明会 (於:水上町他2町)	8/12	県市町)保存管理・整備活用会議(於:大田市)
5/13	県市町)石見銀山遺跡調査整備委員現地 視察(於:鞆ヶ浦・沖泊)	8/23～27	広域)第3回石見銀山講座 (主会場大森町、23名受講)
5/14	県市町)石見銀山遺跡調査整備委員会 (於:あすてらす)	8/25	広域)小田誠太郎氏「世界遺産と熊野古道」 公開講座(於:あすてらす、180名)
5/15.22	市)世界遺産登録取組み状況説明会 (於:大田市民会館・交流センター)	8/26	市町)景観保全審議会委員現地調査 (於:史跡周辺地域)
5/25	市町)第6回史跡保存管理計画策定委員会 (於:大田市)	8/26	大森町民)第4回サイン計画ワークショップ (於:交流センター)
5/25	市町)文化庁記念物課磯村主任調査官 現地指導	8/27	県市町)整備活用会議(於:大田市)
6/4～6/5	県市町)鉱区禁止地域指定請求に係る 地質専門家による現地視察	8/27	県市町)第16回合同会議(於:大田市)
6/14～15	文化庁記念物課永山課長現地視察	8/27	県市町)街道調査検討会(於:松江)
6/15	市)市文化財審議委員藤間亨氏熊谷家 保存修理現地指導(於:大森町)	8/28～31	熊谷家文書調査(於:大田市立図書館)
6/16～17	県)公害等調整委員会委員現地調査	9/1	県市町)史跡追加指定申請文化庁ヒアリング (於:文化庁)
6/19～21	市)小泉和子氏熊谷家家財調査現地指導 (於:大森町)	9/7	県)鉱区禁止地域指定請求に係る公聴会 での公述人現地調査
6/30	県市町)第15回合同会議(於:松江)	9/8～9	県市町)石造物調査部会(於:温泉津町)
6/30	大森町民)第1回サイン計画ワークショップ (於:交流センター)	9/12	世界遺産登録に向けた講演会(於:温泉津町)
7/1	大田・温泉津)景観保全条例施行	9/14～16	市)小泉和子氏熊谷家家財調査現地指導 (於:大森町)
7/4	大森町民他)大森町文化財一斉清掃	9/16	県市・温泉津)斉藤英俊氏指導会(於:筑波大学)
7/6	県)併任者会議(於:松江市)及び視察	9/16	大森町民)サイン計画全体説明会 (於:交流センター、50名)
7/7	市町)国史跡追加指定申請(宮ノ前・銀山街道)	9/16～17	市)文化庁建造物課田中技官熊谷家現地指導 (於:大森町)
7/8	県市)科学調査部会(於:大森町)	9/18～19	国文化審議会分科会史跡委員会現地視察
7/8	大森町民)第2回サイン計画ワークショップ (於:交流センター)	9/21	市町)第8回史跡保存管理計画策定委員会 (於:大田市)
7/9	日本学術会議第一部会現地視察	9/21	市町)第2回景観保全審議会(於:大田市)
7/12～13	小泉和子氏熊谷家家財調査現地指(於:大森町)	9/22	市)文化庁記念物課磯村主任調査官・平 澤麻衣子氏現地指導
7/13	仁摩)景観保全条例施行	9/25	地域づくりシンポジウム(於:サンレディー大田)
7/14	兵庫県猪名川町多田銀銅山遺跡調査 委員会委員現地視察	9/30	大森町民)第5回サイン計画ワークショップ (於:交流センター)
7/15	大森町民)第3回サイン計画ワークショップ (於:交流センター)		
7/17	市)『生産遺跡から探る「モノづくり」の歴 史』第二回シンポジウム 『江戸時代の金・銀・銅―「住友銅吹所跡」 を中心に―』参加		